

## ■しまゆむた

### 与論島の改葬

斉藤 美穂（沖永良部郷土研究会会員）

与論島は現在も改葬の習俗が残る奄美群島唯一の島だ。しかし2003年10月に火葬場「昇竜苑」が完成したのを契機に、土葬（埋葬）件数が激減し、今後は急速に習俗の消滅が進むと予想される。07年5月12～13日に与論町城集落で改葬の作業一連を記録する機会に恵まれた。後世に生かされるべき資料として、ここに紹介する。

取材先は与論町城集落に住む麓才良氏（昭和23年3月12日生）の自宅。1999（平成11）年5月に103歳で死去した麓氏の祖母・マツさんと、火葬場完成間際の03（平成15）年6月に86歳で死去した父・晋さんの2柱の改葬をあわせて執り行った。12～13日はちょうど土日にあたったこともあり、集落内はもとより鹿児島や東京など島外に転出した親族がほとんど集まり、盛大な改葬となった。特に故人の孫やひ孫にあたる若者世代が、その配偶者も含めて多数参加したことが印象的だった。以下、改葬の実際を、写真を交えて紹介する。

#### 前夜祭（5月12日夜）

麓氏宅で12日午後6時過ぎから前夜祭が開かれた。出会者は親族と島内（主に集落内）に暮らす故人縁の人々ら30人余りだった。



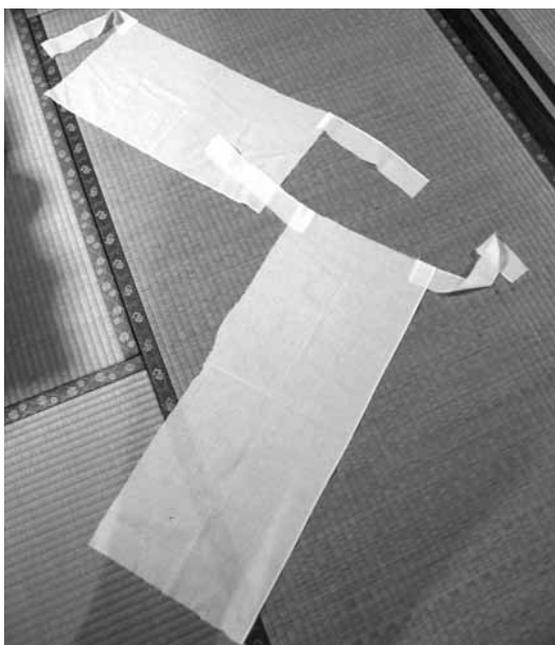
軒先では麓氏が故人の遺骨を納める甕の蓋の内部に墨字で、故人名と享年、没年月日を記していた。甕の外側に記入する場所があるものの、風化しやすいため蓋内部に記すとのことであった。



軒先に用意された改葬用の甕とスコップなどの道具。甕は沖縄産で島内販売されているものを使用。



縁側に設えた故人のための膳（ジヌ、前頁写真）。前夜祭前に家族親族で簡単な食事がとられ、家族とほぼ同じ内容の食事が故人にも供された。膳を並べたテーブルの上には、翌日の改葬で遺骨とともに甕に収める白木綿のカミギヌ（神衣）も用意された。麓氏の母で故・晋さんの妻、麓キミさん（大正9年12月22日生、旧姓・林）によると、前日までに3人で手縫いし、塩を入れた真水に漬けて清め、乾燥させておく。縫う役目は男女を問わないが、必ず3人でひとつのカミギヌを手縫いするとのこと。



上写真は男女共用のカミギヌの上衣、下写真は女性用の腰布と男性用のふんどし。上衣・下衣ともごく簡単な作りになっている。故人縁者などは不祝儀紙に包んだ白い手ぬぐいを持参し神棚に供え、それが後に膳に供えられる（右上写真）。



親族と縁者が揃った頃合でオマツリが始まる。当主の麓氏とその家族を前列に出会者全員が正座し、神棚に手をあわせ、翌日に改葬を行う旨を報告するとともに無事完了するよう祈願する。神式。祝詞はすべて方言で語られ、また原稿のようなものもなく極めて即時性の強い内容のため詳しい聞き取りはできなかった。



神棚への祈りが終わると円座になり、改葬当日の簡単な打ち合わせが行われた。



次に改葬を迎えた故人に対するオマツリが行われる。まずマツさん実家の本家代表で基岸澄さん（昭和7年1月20日生）があいさつ。引き続いて改葬の責任者オトリモチ（お取り持ち）を務めた堀力雄さん（昭和9年1月1日生、マツさん担当）と林国義さん（麓氏実弟、昭和26年6月17日生、晋さん担当）の二人が線香をあげ、それぞれ翌日に改葬を行うと故人に予告し、「きれいに拝みますからオトリモチされてください」などと祈る。



堀さんと林さんによるとオトリモチは「ヤブ（占者）に行き運気をみてもらって決める。運気が良くなければオトリモチはできない」とのこと。前夜祭におけるオトリモチの主な役目は線香を絶やさないことで、かつては一晩中線香の火を点し続けたが、現在では線香を3回程度換えたらお開きとなるという。



改葬当日（5月13日）

与論町誌によると改葬は「ナヌカミシヤ」と呼ぶ旧暦3月27日、「クヌカミシヤ」と呼ぶ旧暦3月29日の早朝に行われる。旧暦8日の両日にも行うという。今回は旧暦3月のナヌカミシヤにあたった。

午前5時半ごろに麓氏宅に到着すると、朝食の準備が進められていた。朝一番で故人の膳のお茶が新しく煎れられ、朝食の膳が整えられたところで再びオトリモチを中心に祈りが捧げられる。



続いて家族親族、加勢人全員に朝食が配られ食事が始まった。オトリモチの二人が最初に膳に箸をつけ、続いて他の全員が食べ始めるといった様子であった。太陽が昇るまでの短い時間、かきこむように大急ぎで食事を済ます。



食事のあと改葬に使う道具などを整えて軽トラックなどに分乗し、午前6時20分ごろに墓所に到着した。麓家の墓所は与論城跡の南側の崖上にある城集落の墓地内にある。この日は故人1柱に10人ずつ、計20人の親族や加勢人がつき、改葬作業にあたった。キミさんによると「年回りが悪いと墓所には来られない」といい、また他の人が

らは「干支などの関係で墓所に来られない人もいる」と聞いた。すでに墓地内では他の2家族が改葬の最中だった。



マツさんの墓（左）、晋さんの墓の前にそれぞれのオトリモチが、頭骨を抱える係のひ孫らとともに座り、焼酎や塩、キュウリを供えて祈りの言葉を述べる。



オトリモチが屋形（ガンブタ）に粗塩、焼酎をふりかけ、初クワを入れる。



それが終わると早速、屋形の解体作業が始まる。屋形のそばに置かれていた故人の持ち物などもすべて取り払われ、可燃物はすぐさま燃やされる。





続いて男性たちが棺の掘り起こしにかかる（前頁）。棺が姿を現すとまず頭骨と下顎の骨が持ち出され、その後、次々と骨が引き上げられる。



洗骨は女性たちが主に担い、真水を満たした発泡スチロールの箱などに骨を入れ、歯ブラシなどを使って丁寧に洗い清める。



今回の故人の骨は肉の付着などがなく、加勢人のひとりが「ちゅらさカミサマになった」と語ったとおり実に美しい状態だった。洗骨されるとさらに美しさが増す。頭骨を抱える係は常に黒い傘の下にいて、太陽に遺骨を晒さないようにする。



すべての遺骨が洗い清められると、いよいよ甕に納め直す。生前の姿そのままに下肢、胴体、上肢、頭の順で下から納められていく。一つひとつの骨の上下も確認しながらの作業で、骨の水分も十分にふき取られる。骨内部からも髄液のような液体が出てくるため、一つずつ丁寧にぬぐう。



上肢までの骨を納めると、白い紙を敷き頭骨を置く。頭骨は下顎骨ときちんと組み合わせるが、故人の入れ歯もその際に噛み合わせておく。頭骨の上に再度白い紙を被せ、カミギヌ一式と、前夜祭で神棚の供え物になっていた白手ぬぐい数本を一番上に入れ蓋をする。手ぬぐいが被せられると遺骨はまったく見えなくなる。



甕が封じられると、いよいよ故人との別れ。蓋が閉じる前に遺骨に触り別れを惜し

む遺族の姿も見られた。



一方、墓所では男性陣が棺などをすべて取り除き、砂を埋め戻す。納骨され直した甕は、墓所の一番奥に埋められる。砂から顔を出すのは、甕の蓋部分のみ。



甕を納める場所はブロックで区切り、周囲を砂で埋める。表面にも新しい砂とサンゴ砂をまいて美しく整える。頭骨を抱いていた孫やオトリモチの手で、さっそく花や焼酎などが供えられる。



最後にオトリモチの音頭で、無事に改葬を終えた旨を報告して祈りを捧げる。作業に参加したすべての親族が墓所に座り、神式で礼拝。これで墓所での作業はすべて終了する。



改葬の一同が自宅まで戻ると、門口には粗塩と清めの水が用意されており、改葬作業にあたった人はすべて身を清めてから敷地内に足を踏み入れる。改葬に使用した道具なども、すぐには敷地内に入れず、敷地の外に1日置いて忌みを払ってから戻し入れるという。



自宅では改葬を無事終えたことを祝い、加勢人らを労う食事が供される。オトリモチの二人は真っ先に神棚に対して手をあわせ、改葬の完了を報告。全員が顔をそろえたところで麓氏の音頭で再び神棚に祈りが捧げられ、その後に食事となった。



改葬後の宴ではオトリモチが特に労われ、トングラを支えた女性たちにも感謝の言葉が贈られた。また故人にまつわる昔話なども語られ、終始祖先を大切にすると論島ならではの心の温かさに満ちていた。

## 土葬・火葬件数の推移

与論町役場町民福祉課がまとめた埋葬(土葬)・改装件数調査表によると、平成以降、土葬がはじめて許可されたのは1994年の2件で、98年まで年間1～2件が続く。火葬件数が急激に伸びるのは2001年の8件、続いて02年の21件、火葬場が完成した03年は一気に50件にまで達した。02年まで火葬件数を上回っていた土葬件数は、火葬場建設を契機に03年から逆転。現在では土葬件数は年間10件未満にまで落ち込んでいる。(表

参照)。役場職員の話によると最近では、特に故人が強く土葬・改葬を希望する場合のみ土葬が選択されるといった現状らしい。数字から見て分かるように、あと数年で改葬の習俗そのものが与論島から消え去る可能性が高い。タブー性が高いので、なかなか赤の他人を招き入れてくれるケースは少ないと聞くと、地元与論の人々の手によってできるだけ多くの記録が残されてほしいと思う。

埋・火葬等許可件数調査表

| 年 計   | 埋葬許可数 | 火葬許可数 |
|-------|-------|-------|
| 平成元年  | 4 7   | 0     |
| 2 年   | 6 1   | 0     |
| 3 年   | 6 7   | 0     |
| 4 年   | 5 5   | 0     |
| 5 年   | 5 6   | 0     |
| 6 年   | 6 5   | 2     |
| 7 年   | 6 6   | 1     |
| 8 年   | 5 1   | 1     |
| 9 年   | 5 2   | 0     |
| 1 0 年 | 4 8   | 1     |
| 1 1 年 | 5 3   | 4     |
| 1 2 年 | 5 4   | 4     |
| 1 3 年 | 5 9   | 8     |
| 1 4 年 | 5 1   | 2 1   |
| 1 5 年 | 3 4   | 5 0   |
| 1 6 年 | 4     | 6 8   |
| 1 7 年 | 4     | 7 6   |
| 1 8 年 | 6     | 6 0   |
| 1 9 年 | 0     | 4 6   |

※19年は、7月5日現在

※本稿に掲載した写真は、許可無く使用しないでください。